

美術品、美術工、藝品の價值もこれにて定めるやうになつてしまつた、然し社會人心の傾向がどうなつても、我々は美術品を贅澤品として混淆するやうでは困る、美術家、工藝家が名聞の爲めに左右せられるやうになつたのは歎かかしい——吾々はどこまでもすべての物の上に眞の趣味を認めることを忘れてはならない——

(禁轉載)

秋の花野

晩

霞

單調なる夏の綠も、オ、シイツク 露が殘暑の森を騒がせ、機織蟲が夕涼みの籬に來て鳴く頃になると、初秋の色は打水したる庭の面に散る桐一葉に現はれ、樂しかりし暑中休暇の日は残り少なくなるのであります。秋風は涼味を送りて、朝な夕な芋の葉に置く露も冷たく、その頃の郊外は、千草の花咲きて、黄、赤、白、紫の麗はしさは眼もくるめくばかりであります。種々なる草には種々特殊の花さきて、古來品題にのぼれるものは、桔梗、菫、女郎花、萩、河原撫子、藤袴等、秋の七草として人々に賞讃されて居ります。

何れの郊外にも千草の花は見られますが、殊に美を叫ぶは、長く裾を曳きたる高原であります。淺間や富士の裾野は、殆んど花もてうづめられて居ります。野の草花の盛時は、野の活動の極まる時であるから、花は皆開き、昆蟲は飛び、草の葉かげに鳴く蟲は、晝より夜を通じて鳴くので、野の聲の高きもこの頃であります。

秋の草花は瀟洒にして、譬へば業なりし人の如く、春の草花は無邪氣なる少女の如くであります。(最新水彩畫法『花の描法』の一節)

* * * * *